O15-37

日赤病院間での国内留学がもたらした当院の腎移植診療の変革

熊本赤十字病院　外科[1)]、熊本赤十字病院　内科[2)]、
熊本赤十字病院　泌尿器科[3)]、熊本赤十字病院　産婦人科[4)]、
熊本赤十字病院　救急科[5)]、
名古屋第二赤十字病院　移植・内分泌外科[6)]

○日高（ひだか）　悠嗣（ゆうじ）[1,6)]、川端　千晶[2)]、山永　成美[1)]、豊田麻理子[2)]、
稲留　彰人[3)]、荒金　太[4)]、横溝　博[1)]、上木原宗一[1)]、
井　清司[5)]、渡井　至彦[6)]

熊本赤十字病院では1988年より腎移植診療を開始し，様々な変遷を経ながら現在は各科の垣根を越え，また看護師や薬剤師など病院全体のスタッフとともに連携を取りながら「腎移植チーム」として診療を行っている．2012年には年間20例の腎移植を達成し，生着率においても向上を見せており，良質な腎移植診療の構築のために日々努力している．各スタッフが学会や研修会へ参加することで診療のブラッシュアップを行っているが，当院ではチームリーダーになるべき医師の国内留学も積極的に行っている．留学先は腎移植診療において日本有数の施設で，同じ赤十字病院の一つである名古屋第二赤十字病院であり，このようなhigh volume centerでの経験によるPK study導入や術後病棟管理の効率化など当院の腎移植診療にもたらした功績は多大である．日本全国に赤十字の名を冠した病院は数多く存在するが，各病院において特色の違いがあることは紛れもない事実である．ここで挙げている腎移植診療だけでなく，各々の特色を生かすために全国の日赤病院間で人事交流を行い，それぞれの病院だけでなく日赤グループ全体として医療の質の向上を図ることは重要な検討課題であると思われる．ここでは例として国内留学によってもたらされた当院の腎移植診療の変革や具体的な研修内容について報告する．